女子大学生における
否定的他者評価に対する反応の検討

津　崎　由希子

津崎　由希子

要旨

問題と目的

葉山・櫻井（2010）は、感情を明確に伝えるという行動が特に親しい友人に行われることを明らかにし、友人との心理的距離が感情表出において重要なことを示唆している。これらのことから、心理的距離は友人関係の深さや感情表出に関連すると考えられる。

そして、崔・新井（1998）は感情の制御を多く行うことは友人関係満足感や精神的健康の低さと結びついていることを明らかにしており、大学生の友人関係において、友人関係に対する満足感や精神的健康を維持するために、ネガティブ感情のある程度の表出が必要であると考えている。

本研究では青年期女子の否定的評価に対する感情表出反応にはどのようなものがあるのかを明らかにすることを目的としている。さらに、カテゴリーに分類された感情表出反応と心理的距離の関係を明らかにすること、感情表出反応と精神的健康の関係を明らかにすることを目的としている。

方法

2015 年 7 月上旬から 9 月下旬にかけて、都内の大学に通う女子大学生・大学院生を対象に質問紙を配布した（有効回答率 88.76％）。

結果

否定的他者評価に対する反応と心理的距離

「攻撃」反応群と「流す・無言」反応群を独立変数とし、心理的距離尺度得点を従属変数とした t 検定を行ったところ、親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては有意な差が見られ、「攻撃」反応群は「流す・無言」反応群よりも得点が低かった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においても有意な差が見られ、「攻撃」反応群は「流す・無言」反応群よりも得点が高かった。

「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、心理的距離尺度得点を従属変数とした t 検定を行ったところ、親しい友人からの否定的評価を受けた場合において有意な差が見られ、「攻撃」反応群は「受け止める」反応群よりも得点が低かった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においても有意な差が見られ、「攻撃」反応群は「受け止める」反応群よりも得点が高かった。

否定的他者評価に対する反応と精神的健康

「流す・無言」反応群と「攻撃」反応群を独立変数とし、友人関係満足感尺度得点を従属変数とした t 検定を行ったところ、親しい友人からの否定的評価を受けた場合において有意な差が見られ、「流す・無言」反応群は「攻撃」反応群よりも得点が低かった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、得点の差は見られなかった。

「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度「居心地の良さの感覚」の下位尺度得点を従属変数とした t 検定を行ったところ、親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては「居心地の良さの感覚」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては有意な差が見られ、「攻撃」反応群は「受け止める」反応群よりも得点が低かった。

考察

否定的他者評価に対する反応と心理的距離

親しい友人に対して、「攻撃」反応を表出する人は心理的距離が近いが、半見知りの人に対して、「攻撃」反応を表出する人は心理的距離が遠いことが明らかになったといえる。心理的距離が近い人（その人のもつ傾向として、心理的距離を近くに取りがちな人）は親しい友人に嫌な気持ちであることを伝え、心理的距離が遠い人は半見知りの人に対して、嫌な気持ちであることを伝えることが示唆された。木野（2004）が、友人と深く関わろうとする傾向が高い人ほど怒りを主張的に表出する傾向が高く、深く関わろうとする傾向が低い人ほど怒りを抑制する傾向があることを明らかにしている。本研究では友人と深くかかわろうとする傾向が高い人、すなわち心理的距離が近い人は、親しい友人に対して「攻撃」反応を多く示しており、これは、親しい友人から否定的評価を受けた場合に限られるが、木野（2004）の研究結果と一致している。

否定的他者評価に対する反応と精神的健康

親しい友人に対して肯定も否定もせず曖昧にふるまう人（「流す・無言」反応を表出する人）は気持ちをありのまま表出する人（「攻撃」反応を表出する人）より、友達付き合いにおいて満足していないことが明らかになったのであり、これは、崔・新井（1998）の感情表出の抑制を多く行う人は友人関係の満足感が低いという結果と一致するものである。

学校は半見知りの人が大多数を占める環境であるがその中において、「攻撃」反応を表出することは周囲と摩擦が生じる可能性があると考えられる。よって、学校への適応感尺度の「居心地の良さの感覚」のみにおいてではあるが、得点が低

くなったと考えられる。

半見知りの人に対してあからさまな感情表出反応をすること（「攻撃」反応を表出すること）は、半見知りという中間的関係においてふさわしい行動スキルを学んできていないこと、すなわち、不適応的であることを示すと考えられるが、このことが学校適応感における「居心地の良さの感覚」において確かめられたと言える。

文献

崔　京姫・新井邦二郎（1998）．ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係　教育心理学研究，46，432-441.

問題

1　学校生活における摩擦

近年、インターネット、メールによるいじめが注目されるようになったことで、東京都教育委員会（2015）は「SNS東京ルール」を策定している。「SNS東京ルール」では、送信前には、相手の気持ちを考えて読み返し、受け手への十分な配慮に基づいて情報を発信できる能力や態度について注意を促している。自分が発した言葉が相手の受け取り方によっては「いじめ」となりうる可能性があると考えられる。ここから、円滑な対人関係を築く上で、コミュニケーションのやり取りは非常に重要なものとなってくると考えられる。本研究では他者から評価される場面を想定し、とくに対人関係において摩擦の生じやすい否定的な評価場面を取り上げ、否定的な評価を受けた際に、どのような反応をするのかについて注目し検討を行っていく。

2　心理的距離について

青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究を行った金子（1989）は、心理的距離を、友人と自己が、ある他者との間で、どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解し合った関係を持っていると感じているかの度合いと定義している。葉山・櫻井（2010）は、感情を明確に伝えるという行動が特に親しい友人に行われることを明らかにし、友人との心理的距離が感情表出において重要なことを示唆している。これらのことから、心理的距離は友人関係の深さや感情表出に関連すると考えられる。

岡田（1993）は心理的距離が大きく同調性が強い表面群について、他者の目を気にし、他者との調和も大切にし、同調行動をとっているが、集団中心の生き方を望んでいるのでも協力的であるのでもなく、心理的

には友人たちと離れていて、ただ集団から外れまいと群れ集っているだけであるとしている。

以上のことから、心理的距離は他者からの評価と密接であると考えられる。この他者からの評価には肯定的・否定的の両者があるが、本研究では、とくに否定的他者評価に注目し、それに対する感情表出反応に注目していく。

3　感情表出について

私たちは日常の経験を通して、さまざまな感情を抱きながら生活しているが、この感情には喜び・楽しさといったポジティブな感情と怒りや悲しさ、不安、失望といったネガティブな感情がある（崔・新井，1998）。

崔・新井（1998）は、私たちは自分の経験する感情そのものを制御するだけでなく、感情の表出に対しても何らかの制御を行うことが少なくないと指摘している。このように、ネガティブ感情をそのまま表出させることは対人関係をぎくしゃくさせるのに対し、ネガティブ感情表出の制御を行うことは、対人関係を円滑に進めるための機能をもつと考えられる。

4　感情表出と精神的健康

崔・新井（1998）は感情の制御を多く行うことは友人関係満足感や精神的健康の低さと結びついていることを明らかにしており、大学生の友人関係において、友人関係に対する満足感や精神的健康を維持するために、ネガティブ感情のある程度の表出が必要であると考えている。

また、五十嵐・荒木・杉浦（2013）は自分が傷つかないようにする傾向が強く、友人に対して一歩引いた関わりをもち、感情を表出する機会が少ない、もしくは抑制している人は精神的健康が低いことを明らかにしている。

以上のことから、感情の制御を多く行うことが精神的健康の低さと関

係するといえるのであるが、一方で感情をそのまま表出させることは対人関係をぎくしゃくさせ、その結果精神的健康の低下をまねく可能性があると考えられる。本研究では、感情表出をすることと制御することのどちらが精神的健康の低さと関係しているのかを明らかにしていこうと考えている。

目的と仮説

1　目的

本研究では青年期女子の否定的評価に対する感情表出反応にはどのようなものがあるのかを明らかにすることを目的としている。さらに、カテゴリーに分類された感情表出反応と心理的距離の関係を明らかにすること、感情表出反応と精神的健康の関係を明らかにすることを目的としている。

2　仮説

仮説1：「攻撃」の反応を表出する人は、他の反応を表出する人より心理的距離の得点が低いだろう。

友人との心理的距離が感情表出において重要であること（葉山・櫻井，2010）や友人と深く関わろうとする傾向が高いほど、怒りを主張的に表出する傾向が高いこと（木野，2004）から仮説1を立てた。

仮説2：親しい友人に対して、「流す・無言」の反応を表出する人は、他の反応を表出する人より友人関係満足感と学校への適応感の得点が低いだろう。

感情表出の抑制を多く行う人は、友人関係の満足感と精神的健康が低いこと（崔・新井，1998）や友人に対して一歩引いた関わりをもち、感情を抑制している人は精神的健康が低いこと（五十嵐ら，2013）から仮

説2を立てた。

仮説3：半見知りの人に対して、「攻撃」反応を表出する人は、他の反応を表出する人より、友人関係満足感・学校適応感の得点が低いだろう。

半見知りの人は親しい友人と比べて、まさに親密でないがゆえに遠慮を働かせた交流を保つ必要がある（土居，2013）。このため半見知りの人に対してあからさまな感情表出反応をすることは、半見知りという中間的関係においてふさわしい行動スキルを学んできていないこと、すなわち、不適応的であることを示すと考えられ、またスキル不足から友人との関係が不満足なものになりがちであると考えられることから仮説3を立てた。

方法

1　調査参加者

都内の大学に通う女子大学生・大学院生を対象に質問紙を配布した。回収した267名のうち、回答に不備があった30名を除き、237名を有効回答者とした（有効回答率 88.76％）。親しい友人からの否定的評価を受けた場面を想定した質問紙への有効回答者114名、半見知りの人からの否定的評価場面を想定した質問紙への有効回答者123名であった。平均年齢は19.20歳であった。

2　調査時期

2015年7月上旬から9月下旬にかけて実施した。

3　調査方法

親しい友人からの否定的評価場面を想定した質問紙と半見知りの人からの否定的評価場面を想定した質問紙、2種類の質問紙をランダムに配

布し、実施した。調査を始める前に調査参加は任意であり、途中で回答も止めることができることを説明し、合意を得て回答してもらった。調査の所要時間は15分程度であった。

4　調査内容

質問紙に使用した尺度はTable1に示した。

Table1. 本調査の質問紙の構成

	使用した尺度	回答法	項目数
1	フェイスシート（学年・年齢）		
2	外見・内面に関する否定的他者評価（親しい友人・半見知りの人）	自由記述	
3	友人との心理的距離尺度	4件法	10項目
4	友人関係満足感尺度	4件法	6項目
5	学校への適応感尺度	5件法	30項目

5　外見・内面に関する否定的他者評価

否定的評価場面は略画を用いた場面想定法を使用した（Figure1）。本研究では、親しい友人から否定的評価をされた場面を想定する条件と半見知りの人から否定的評価をされ、想定する条件の2つを使用した。「半見知り」という語は、対人関係場面のあいまいさをテーマとした研究において用いられているが（友野・橋本，2005）、その意味は十分明確ではなく、認識が調査協力者によって異なる可能性があると考え、本調査では「クラスメイトなど表面上の付き合いにとどまっている人」と質問紙内に記した。

Figure1の①には親しい友人もしくは半見知りの人から受けた内面に関する否定的評価を記述してもらい、②には否定的評価に対する返答を記述してもらった。

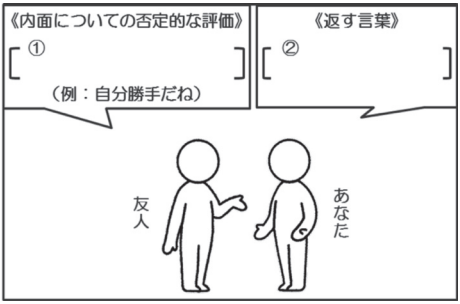

Figure1. 略画を用いた否定的評価場面

結果

以下に、本研究の分析方法を次のような点を指針として分析を行った。研究には、あらかじめ特定の仮説が設けられている場合と、特に仮説を設けていない場合があり、前者を計画された比較、後者を事後比較というが（森・吉田，1990）、本研究は前者の計画された比較といえることから分散分析をせず、直接 t 検定を行うこととした。

1　否定的他者評価に対する反応

親しい友人からの否定的評価に対する反応を KJ 法にて見出した。「攻撃」反応は 22 人（19.30％）、「流す･無言」反応は 34 人（29.82％）、「受け止める」反応は 58 人（50.88％）であった。

半見知りの人からの否定的評価に対する反応では、「攻撃」反応は 32 人（26.02％）、「流す」反応は 44 人（35.77％）、「受け止める」反応は 47 人（38.21％）であった。親しい友人、半見知りの人ともに表出された反応で多かったのは「受け止める」反応で、少ない反応は「攻撃」反応であった。

2　否定的他者評価に対する反応と心理的距離

「攻撃」反応群と「流す・無言」反応群を独立変数とし、心理的距離尺度得点を従属変数とした t 検定を行った（Figure2）。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（54）=-2.54（$p < .01$）であり、両群の得点に有意な差が見られた。「攻撃」反応群の得点の平均は 17.64（SD=4.39）、「流す・無言」反応群は 20.76（SD=4.57）であったことから、「攻撃」反応群は「流す・無言」反応群よりも得点が低かった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（74）=2.90（$p < .01$）であり、両群の得点に有意な差が見られた。「攻撃」反応群の得点の平均は 23.00（SD=5.32）、「流す・無言」反応群は 19.84（SD=4.16）であったことから、「攻撃」反応群は「流す・無言」反応群よりも得点が高かった。

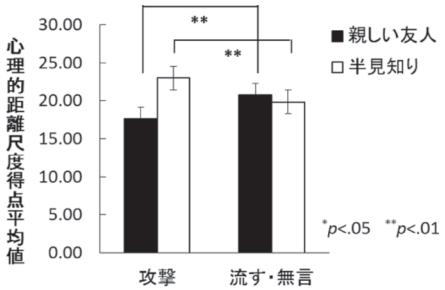

Figure2.「攻撃」反応群と「流す・無言」反応群における
心理的距離得点平均値

「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、心理的距離尺度得点を従属変数とした t 検定を行った（Figure3）。

その結果、親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（78）=-2.05（$p < .05$）であり、両群の得点に有意な差が見られた。「攻撃」反応群の得点の平均は 17.64（SD=4.39）、「受け止める」反応群は 19.78（SD=4.08）であったことから、「攻撃」反応群は「受け止める」反応群

よりも得点が低かった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（77）=3.38（p ＜ .01）であり、両群の得点に有意な差が見られた。「攻撃」反応群の得点の平均は 23.00（SD=5.32）、「受け止める」反応群は 19.26（SD=4.49）であったことから、「攻撃」反応群は「受け止める」反応群よりも得点が高かった。

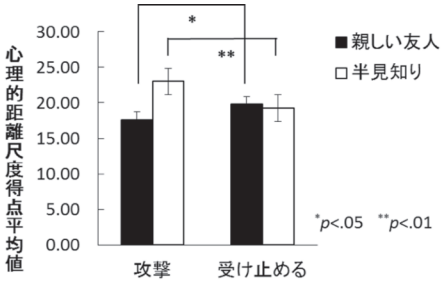

Figure3.「攻撃」反応群と「受け止める」反応群における
心理的距離得点平均値

3　否定的他者評価に対する反応と友人関係満足感

「流す・無言」反応群と「攻撃」反応群を独立変数とし、友人関係満足感尺度得点を従属変数とした t 検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（51）=2.28（p ＜ .05）であり、両群の得点に有意な差が見られた。「流す・無言」反応群は 16.74（SD=2.76）、「攻撃」反応群の得点の平均は 18.50（SD=2.79）であったことから、「流す・無言」反応群は「攻撃」反応群よりも得点が低かった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（73）=-1.37 であり、両群における得点の差は見られなかった。

「流す・無言」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、友人関係満足感尺度得点を従属変数とした t 検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（86）=-1.10

であり、両群における得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（77.19）=.15であり、両群における得点の差は見られなかった。

「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、友人関係満足感尺度得点を従属変数としたt検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（77）=1.86であり、両群における得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（76）=-1.51であり、両群における得点の差は見られなかった。

4　否定的他者評価に対する反応と学校適応感

「流す・無言」反応群と「攻撃」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度の「居心地の良さの感覚」の下位尺度得点を従属変数としたt検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（54）=1.52であり、両群における「居心地の良さの感覚」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（53.98）=-1.93であり、両群における「居心地の良さの感覚」の下位尺度得点の差は見られなかった。

「流す・無言」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度「居心地の良さの感覚」の下位尺度得点を従属変数としたt検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（90）=-1.68であり、両群における「居心地の良さの感覚」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（89）=-.62であり、両群における「居心地の良さの感覚」の下位尺度得点の差は見られなかった。

「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺

度「居心地の良さの感覚」の下位尺度得点を従属変数とした t 検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（78）=.28 であり、両群における「居心地の良さの感覚」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（77）=-2.46（$p < .05$）であり、両群の得点に有意な差が見られた。「攻撃」反応群は 38.78（SD=8.87）、「受け止める」反応群の得点の平均は 43.23（SD=7.17）であったことから、「攻撃」反応群は「受け止める」反応群よりも得点が低かった。

「流す・無言」反応群と「攻撃」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度の「課題･目的の存在」の下位尺度得点を従属変数とした t 検定を行った。親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（54）=1.13 であり、両群における「課題・目的の存在」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（74）=-.55 であり、両群における「課題・目的の存在」の下位尺度得点の差は見られなかった。

「流す・無言」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度の「課題・目的の存在」の下位尺度得点を従属変数とした t 検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（90）=-1.27 であり、両群における「課題・目的の存在」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（89）=-.65 であり、両群における「課題・目的の存在」の下位尺度得点の差は見られなかった。

「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度の「課題･目的の存在」の下位尺度得点を従属変数とした t 検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（78）=.22 であり、両群における「課題・目的の存在」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（77）

=-1.04であり、両群における「課題・目的の存在」の下位尺度得点の差は見られなかった。

「流す･無言」反応群と「攻撃」反応群を独立変数とし､学校適応感尺度「被信頼感・受容感」の下位尺度得点を従属変数としたt検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（54）=.56であり、両群における「被信頼感・受容感」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては､t（74）=-.28であり、両群における「被信頼感・受容感」の下位尺度得点の差は見られなかった。

「流す・無言」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度の「被信頼感・受容感」の下位尺度得点を従属変数としたt検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（90）=-.19であり、両群における「被信頼感・受容感」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては､t（89）=.72であり、両群における「被信頼感・受容感」の下位尺度得点の差は見られなかった。

「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度の「被信頼感･受容感」の下位尺度得点を従属変数としたt検定を行った。親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（78）=.50であり､両群における「被信頼感･受容感」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては､t（77）=.32であり、両群における「被信頼感・受容感」の下位尺度得点の差は見られなかった。

「流す・無言」反応群と「攻撃」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度の「劣等感のなさ」の下位尺度得点を従属変数としたt検定を行った。親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（54）=-1.30であり､両群における「劣等感のなさ」の下位尺度得点の差は見られなかっ

た。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（74）=.91であり、両群における「劣等感のなさ」の下位尺度得点の差は見られなかった。

「流す・無言」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度の「劣等感のなさ」の下位尺度得点を従属変数としたt検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（90）=.19であり、両群における「劣等感のなさ」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（89）=-.37であり、両群における「劣等感のなさ」の下位尺度得点の差は見られなかった。

「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度の「劣等感のなさ」の下位尺度得点を従属変数としたt検定を行った。

親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、t（78）=.28であり、両群における「劣等感のなさ」の下位尺度得点の差は見られなかった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、t（77）=.70であり、両群における「劣等感のなさ」の下位尺度得点の差は見られなかった。

考察

1　否定的他者評価に対する反応と心理的距離（仮説1の検証）

仮説1の「攻撃」の反応を表出する人は他の反応を表出する人より心理的距離の得点が低いだろう、についての考察をしていく。

「攻撃」反応群と「流す・無言」反応群を独立変数とし、心理的距離尺度得点を従属変数としたt検定を行った結果、親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、「攻撃」反応群は「流す・無言」反応群よ

りも心理的距離得点が低かった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、「攻撃」反応群は「流す・無言」反応群よりも心理的距離得点が高かった。

「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、心理的距離尺度得点を従属変数とした t 検定を行った結果、親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、「攻撃」反応群は「受け止める」反応群よりも心理的距離得点が低かった。半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、「攻撃」反応群は「受け止める」反応群よりも心理的距離得点が高かった。

以上のことから、親しい友人に対して、「攻撃」反応を表出する人は心理的距離が近いが、半見知りの人に対して、「攻撃」反応を表出する人は心理的距離が遠いことが明らかになったといえる。ここから、仮説1の“「攻撃」の反応を表出する人は他の反応を表出する人より心理的距離の得点が低いだろう”は一部支持されたといえる。

心理的距離が近い人（その人のもつ傾向として、心理的距離を近くに取りがちな人）は親しい友人に嫌な気持ちであることを伝え、心理的距離が遠い人は半見知りの人に対して、嫌な気持ちであることを伝えることが示唆された。木野（2004）が、友人と深く関わろうとする傾向が高い人ほど怒りを主張的に表出する傾向が高く、深く関わろうとする傾向が低い人ほど怒りを抑制する傾向があることを明らかにしている。本研究では友人と深くかかわろうとする傾向が高い人、すなわち心理的距離が近い人は、親しい友人に対して「攻撃」反応を多く示しており、これは、親しい友人から否定的評価を受けた場合に限られるが、木野（2004）の研究結果と一致している。

また、本研究で扱った心理的距離はパーソナリティの側面としての心理的距離であったが、親しい友人と半見知りの人という相手によって、否定的評価に対する反応が異なるという結果が示された。

この点に関して、心理的距離を遠くにとる傾向がある人と半見知りの

相手として認知する人との人間関係は非常に希薄であると考えられる。このような、希薄な関係の相手は当人にとって重要な存在であることはなく、そのような相手との関係が切れてしまうことを恐れる必要がないため「攻撃」反応を容易に表出できると考えられる。このため、半見知りの人に対して、「攻撃」反応を表出する人は心理的距離が遠いという結果が示されたと考えられる。

2　否定的他者評価に対する反応と精神的健康（仮説２の検証）

仮説２の親しい友人に対して、「流す・無言」の反応を表出する人は他の反応を表出する人より友人関係満足感と学校への適応感の得点が低いだろう、についての考察をしていく。

「流す・無言」反応群と「攻撃」反応群を独立変数とし、友人関係満足感尺度得点を従属変数とした t 検定を行った結果、親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、「流す・無言」反応群は「攻撃」反応群よりも友人関係満足感得点が低かった。

「流す・無言」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、友人関係満足感尺度得点を従属変数とした t 検定を行った結果、親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、「流す・無言」反応群と「受け止める」反応群の両群における得点の差は見られなかった。

「流す・無言」反応群と「攻撃」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度得点を従属変数とした t 検定を行った結果、親しい友人からの否定的評価を受けた場合においては、「流す・無言」反応群と「攻撃」反応群の両群における学校適応感下位尺度の「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼感･受容感」、「劣等感のなさ」得点の差は見られなかった。

「流す・無言」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度得点を従属変数とした t 検定を行った結果、親しい友人からの否定的評価を受けた場合において、「流す･無言」反応群と「受け止める」

反応群の両群における学校適応感下位尺度「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼感・受容感」、「劣等感のなさ」の得点の差は見られなかった。

以上のことから、仮説2“親しい友人に対して、「流す・無言」の反応を表出する人は他の反応を表出する人より友人関係満足感と学校への適応感の得点が低いだろう”は、「流す・無言」の反応を表出する人と「攻撃」反応を表出する人の間において、また、友人関係満足感においてのみ支持された。

親しい友人に対して肯定も否定もせず曖昧にふるまう人（「流す・無言」反応を表出する人）は気持ちをありのまま表出する人（「攻撃」反応を表出する人）より、友達付き合いにおいて満足していないことが明らかになったのであり、これは、崔・新井（1998）の感情表出の抑制を多く行う人は友人関係の満足感が低いという結果と一致するものである。

仮説を立てた際に、感情表出の抑制を多く行う人は、友人関係の満足感が低く（崔・新井，1998）、友人に対して、一歩引いた関わりをもち、感情を抑制している人は精神的健康が低い（五十嵐ら, 2013）と考えたが、このことが一部友人関係の満足感において、確かめられたと言える。「流す・無言」の反応を表出する人は、否定的評価を受けて、不快と感じたとしても、肯定も否定もしない曖昧なふるまいで、その場をやり過ごすことができるという適応のための能力をもっているが、相手に対して感情を表出することを抑制する点で、フラストレーションを感じる可能性が高い。ここから、友人関係の満足感が低いという結果となったのであろう。

3　否定的他者評価に対する反応と精神的健康（仮説3の検証）

仮説3の半見知りの人に対して、「攻撃」反応を表出する人は他の反応を表出する人より、友人関係満足感・学校適応感の得点が低いだろう、についての考察をしていく。

「攻撃」反応群と「流す・無言」反応群を独立変数とし、友人関係満足感尺度得点を従属変数とした t 検定を行った結果、半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、「攻撃」反応群と「流す・無言」反応群の両群における友人関係満足感得点に差は見られなかった。

また、「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、友人関係満足感尺度得点を従属変数とした t 検定を行った結果、半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においても、「攻撃」反応群と「受け止める」反応群の両群の間における友人関係満足感得点に差はみられなかった。

「攻撃」反応群と「流す・無言」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度得点を従属変数とした t 検定を行った結果、半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においては、「攻撃」反応群と「流す・無言」反応群の両群における学校適応感下位尺度の「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼感・受容感」、「劣等感のなさ」の得点の差は見られなかった。

「攻撃」反応群と「受け止める」反応群を独立変数とし、学校適応感尺度得点を従属変数とした t 検定を行った結果、半見知りの人からの否定的評価を受けた場合においても、「攻撃」反応群は「受け止める」反応群よりも学校適応感下位尺度「居心地の良さの感覚」の得点が低かった。また、「課題・目的の存在」、「被信頼感・受容感」、「劣等感のなさ」の得点の差は見られなかった。

以上のことから、仮説3“半見知りの人に対して、「攻撃」反応を表出する人は他の反応を表出する人より、友人関係満足感・学校適応感の得点が低いだろう”は一部、学校適応感の「居心地の良さの感覚」に関してのみ、また「攻撃」反応と「受け止める」反応の間においてのみ支持された。

学校は半見知りの人が大多数を占める環境であるがその中において、「攻撃」反応を表出することは周囲と摩擦が生じる可能性があると考えられる。よって、学校への適応感尺度の「居心地の良さの感覚」のみにお

いてではあるが、得点が低くなったと考えられる。

半見知りの人に対してあからさまな感情表出反応をすること（「攻撃」反応を表出すること）は、半見知りという中間的関係においてふさわしい行動スキルを学んできていないこと、すなわち、不適応的であることを示すと考えられるが、このことが学校適応感における「居心地の良さの感覚」において確かめられたと言える。

4　今後の課題

否定的他者評価に対する反応を自由に記述してもらったものをKJ法で分類した結果、「攻撃」反応、「流す・無言」反応、「受け止める」反応の3つのカテゴリーが見出された。カテゴリーの分類において、「攻撃」反応、「受け止める」反応は比較的評定が容易な反応であったが、「流す・無言」反応は曖昧に振る舞っているという内容であり、記述された言葉もかなり曖昧であり、カテゴリーの信頼性の検討の際も、分類に関して評定者の間で意見が割れやすかった。この点で、「流す・無言」反応はカテゴリーとしての検討の余地があると考えられる。

また、本研究では、否定的評価に対する反応と併せてそのときに感じた気持ちを尋ねていたが、カテゴリーの分類をするにあたり、反応と気持ちの組み合わせを用いるとカテゴリーが非常に多様になってしまったため、気持ちを含めた検討を行うことを断念した。しかし、否定的評価に対する反応においては、謝罪をしたり、アドバイスを求めたりといった相手の言葉を受け止める、「受け止める」反応を表出していたものの、そのときに感じた気持ちには、「悲しい」や「なんでそんなことを言われないといけないの」といったものが見られ、表出される反応と感じている気持ちが必ずしも一致しているとはかぎらないことが明らかになった。相手に表出した反応のみを本研究では取り上げたが、反応と併せて気持ちも取りあげ、さらには表情といった行動にも着目し研究していくことが今後の課題になると考えられる。

さらに、本研究では「攻撃」反応を表出した後の相手（親しい友人、半見知りの人）の反応や気持ちなどを調査しておらず、「攻撃」反応を表出した人の自分の気持ちに沿った返答の言葉を相手が受け入れることができるかは明らかになっていない。評価された人と評価した人の関係の変化の過程を調査していくことが今後の課題としてあげられるだろう。

なお、本研究は特定の仮説が設けられていたため、計画された比較として分散分析をせず、直接 t 検定を行った。このやり方は危険率を高く見積もっている可能性があるため、今後さらに研究を重ねる場合には、この点に配慮した分析を行っていかなければならないと考えられる。

文献

崔　京姫・新井邦二郎（1998）．ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係　教育心理学研究，46，432-441.

土居健郎（2013）．「甘え」の構造　弘文堂

小学館（2015）．デジタル大辞泉　goo 辞書ホームページ http://dictionary.goo.ne.jp/jn/163102/meaning/m0u/%E6%B5%81%E3%81%99/　（2016 年 1 月 12 日）

葉山大地・櫻井茂男（2010）．冗談に怒りを感じた場面における聞き手の反応を規定する要因の検討―拒否に対する感受性，話し手との関係性，周囲の反応に着目して―　教育心理学研究，58，393-403.

日比野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富二雄（2005）．中学生における怒り表出行動とその抑制要因―自己愛と規範の観点から―　心理学研究，76，417-425.

五十嵐哲也・荒木優美・杉浦るりこ（2013）．大学生における友人関係の類型別による感情表出の違い　愛知教育大学保健環境センター紀要，12，29-37.

石本雄真・久川真帆・齋藤誠一・上長　然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平（2009）．青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連　発達心理学研究，20，125-133.

金子俊子（1989）．青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究　青年心理学研究，3，10-19.

木野和代（2000）．日本人の怒りの表出方法とその対人的影響　心理学研究，70，494-502.

木野和代（2004）．対人場面における怒りの表出方法の適切性・効果性認知とその実行との関連　感情心理学研究，10，43-55.

沓名翔子・中島綾香・五十嵐哲也（2011）．中学生の友人関係スタイルと怒り表出との関連　愛知教育大学保健環境センター紀要，10，23-31.

森　敏昭・吉田寿夫（1990）．心理学のためのデータ解析テクニカルブック　北大路書店

岡田　努（1993）．現代青年の友人関係に関する考察　青年心理学研究，5，43-55.

東京都教育委員会（2015）．「SNS 東京ルール」の策定について　東京都教育委員会ホームページ　http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/pickup/seisaku/seisaku_net/snsrule/siryou.pdf（2015 年 12 月 5 日）.

友野隆成・橋本　宰（2005）．改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み　パーソナリティ研究，13，220-230.

上野行良・上瀬由美子・松井　豊・福富　護（1994）．青年期の交友関係における同調と心理的距離　教育心理学研究，42，21-28.